

あふあふ食ぶ

児玉かつ 宮城

枯れながらわが指を刺す黄の薔薇よ過去世はいかに厳しかりしか
ぶらさがるゴーヤいくつに見られたり歌作る老いのしかめつ面を
長月のゆふべの寒さ 話すなく夫と豚汁あふあふ食ぶ
おばあちゃんあのねと六歳話し出す小さきマスクをふくらませつつ
もうやめる人と思へば菅さんを見ても前ほど不快ではない

デルタ

佐々木鏡子 秋田

晴れの日に必ず見えると限らない気まぐれなをとこ男鹿半島は
デルタとはまうゐをふるふ変異株ナイル河口の州のことでなし
若き日にただ一度だけ乗りにけりデルタ機のタグかばんに残る
α星βカロテンエト・セトラウは夫の遺愛の時計
和鉄はをさな心にこはかりき雀の舌をちよん切つたゆゑ

昭和のトマト

遠藤豊子 埼玉

電線に密にならんでゐる雀風にゆれあふ密のコスモス
巢ごもりに胸にのこるを再読す三浦哲郎の短編『鳥寄せ』
ぶかつかうだがうまかつた太陽を直接あびた昭和のトマト
一冊が一話、随筆を読むやうでアルバムどうしても捨てられません
泳げないまま跳箱をとべぬまま葱きらふまま一生を終ふ

垂れ下がる紐

小倉

敬* 神奈川

七日ぶりにのぞく青空 窓際の席も悪くはないな今日なら
巻き終えたブラインドから垂れ下がる紐が貧乏ゆすりしている
呼ばれずに始まる会議くぐもった声が部屋から漏れてくるなり
会話らしい会話なきまま一日は書類をめくる速度で進む
打ち合わせしている輪から笑い声うまくいつてるみたいじゃないか

もりとかけ

四野宮 和之 東京

〈五十一年連続の過去最多〉これは百歳以上のみなさま
予備校と産婦人科にはさまれてスポーツジムあり駅の壁面
気にしてるわけでなければ今朝バスに乗らざる習字教室のひと
〈外飲み〉の無くてなつかし二次会の新宿よりの帰路のへべれけ
もりとかけどちらにするかまよふらし気温が二十三度の初秋

緑金のなか

柴田 佳美 東京

ほんたうに偶然だと子は思つてる塾終はるころ夫が通るを
ヒアリング用のCDなくなつてダウンロードにこの秋変はる
ガレージに雀の子ども死にゐたり秋の霖雨に羽くろく濡れ
木の元に小鳥を埋めてしばらくを瞑する雨後の緑金のなか
自転車のサドルが秋の陽に乾き吉川英治を借りに行くなり

遠い潮騒

三 浦 陽 子 長 野

息ながく吐きつつフラを踊るとき指さきに聴く遠い潮騒
むらさきの傘さしてゆく夕まぐれ濡れてゆかうといふ人のなく
言ひかけた夏のことばをかるがると攫つてゆきぬ此岸の風は
名を知らぬ小さき虫を退治したわが手をつつむ夜のともしび
塵ひとつ拾はんとして屈みたるわが影淡く床にひろがる

〈もしかして〉

榛 葉 貞 代 静 岡

果たさざることいくつかも遥かなり富士のお山に富士薊さく
括り染めの絞りがつんと立ちてゐる宿再開の女将の帯揚げ
きゆつと結びぼんと叩きて歩き出す女将の帯は美しき青海波
へもしかして〉がむくむく膨らみ大脳がカリフラワーになつてしまへり
取説はやつぱり苦手読み止して凡そで使ふビールサーバー

白雲

小 嶋 啓 生 愛 知

生きてゐる証しなるべし車椅子へ乗り移るたび襲ふ腰痛
カーテンをやや利く脚に開け放ちさあ飛び立たむ処女地のけふへ
さう多分、変らぬ味さ しかすがに冬限定の缶ビール買ふ
自らを生きるほかなしひめやかに師走の土へ沁みてゆく雨
刻々にさま移ろへる白雲や生れ来るもの去つてゆくもの

ホテイアオイ

米田郁夫 奈良

つくばひの縁を這ひ行くカタツムリ今年生まれか殻の小さし
つくばひのホテイアオイを雨打ちぬ弟逝きて百ヶ日迎ふ
水に浮くホテイアオイの花に降る雨はむらさきほのかに香れ
つんつんと浮草の根をつつきある白いメダカの小さき命
体には大小あれどメダカ、亀命はみんな同じ大きさ

秋一報

栗山由利 福岡

あけがたの雨だれのおとのあひまから秋一報のこほろぎのこゑ
ひとつづつとりだす昭和の記憶からきえてしまつた雨漏りのおと
とほくなる昭和の時代はこはいものしらずのわたしが生きてゐたとき
「4」と「5」の数のあひだにどれほどの差があるんだか四捨五入とは
こほろぎのこゑにも負けるかほそさで九月の蟬が夏じまひする

あとにしようか

立石千代女 長崎

雨雲をカーテンのやうに開けたしもハイビスカスに初花咲きて
つぼみからふた月を経て咲きそめし秋明菊ぞ台風来るな
気の重き電話かけむと立ちたれば猫が戯れつくあとにしようか
ケータイの電波とどかぬ森へ来つ白雪姫と小人はゐぬか
鳥が海のうへを飛ぶやう車椅子バスケのエース鳥海連志